

「見ないのに信じる」

クレジットカードを作る時、保険を掛ける時、銀行口座を作る時、有価証券取引を始める時。私たちは、必ず膨大な字数の文章と出会います。契約文、規約文という名の、「これ、一体だれが書き上げたんだろうか」と思える程の、小さくて小難しくて、でも、きっと隙の無い、非常に精密なのだろう、そんな文章です。正直、読んでもらう気があるのか、と感じるのですが、人と人、人と会社が契約を交わす時には、そういう緻密な文章が必ず必要なのでしょう。でも、私の心の中に常に燻っているのは、「この面倒くさい文章、全部、読んでいる人っているんだろうか。読んでいないのって、自分だけなのか」という、小さな疑問であり、興味です。皆さんは、最近、交わした契約で、その時サインか印鑑を押した文章の隅々まで読みましたか？ 長年、抱えたこの疑問を、私は、とうとうこの前、お世話になっている保険屋さんに聞いてみました。「この規約文、全部読んでいる人っているんですか？」と、すると、「いや、いないですね」と素っ気ない返事でした。やっぱり、そういうもんなんだなあ、と 40 歳を手前に、しょうもない確認をした次第です。まあ、規約文を提示してサインを求めておいて、「読んでもる人いないですね」と事も無げにいう保険屋さんも、どうかと思いますが。知恵に深いイエス様が隣にいたら「おまえは、契約書をよく見ないのに信じるのか」と言われるんだろうか、どうなんだろうか。なんて勢い余って、さらにしょうもないことも考えてしまいます。

「見ないのに信じる」というのは、普通、愚かな行いです。見て、読んで、あるいは触って、味わって、確かめて、そして、納得して、信じるのが多くの場合、適切なプロセス、正しい手順だと言えます。契約を交わすにしても、ニュースや情報を受け取るにしても、美味しいレストランを探

すにしても、確信を持つ前に、ひと手間も、ふた手間も要するものです。グルメ雑誌でたまたま見つけただけの良さそうなお店で、重要な接待をするのは危険ですよ。情報源が明らかにされていないニュース記事を鵜呑みするのも現在の一般常識からすれば間違いのもとです。そして、本当なら大事な契約の時には、規約文の隅々にまで目を通して「よし、大丈夫だ」と得心できた方がいい。

「見ないのに信じる」と言うのは、そんな風に、良くない姿勢、危うい態度として見なさないと、私たち人間の側からは、そう思ってしまいます。だから、今日の聖書箇所が登場した、おそらくご本人にとっては非常に不本意な形で有名になってしまった「懐疑者トマス」またの名を「疑心家トマス」の言い放った、この言葉。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」という訴えは、むしろ、慎重で、思慮深く、賢いんじゃないかと思います。「見ないのに信じる」のは、やっぱりリスクが高い……。出来るなら、証拠を見たい、確かさに触れたい。それが安心安全です。

けれど、この信じるということに関して、例えば、パウロさんは、こんな言葉を残しました。コリントの信徒への手紙一 1 章 21 節。「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです」。そもそも、こうやって聖書の話をする、神様の御言葉を取り次ぐという、教会の営み全体が「愚かな手段」であるということ。そして、御言葉を取り次ぐという点で言えば、トマスさんが、他の弟子たちから聞かされた「わたしたちは主を見た」という言葉による報告も、それは、「愚かな手段」なんですよ。そして、この考え方を拡張し、聖書全体に当てはめていきますと、この聖書に書かれていることすべてが、御言葉の記録であり、宣教の記述であり、つまり、実態や現実を伴わない、愚かな手段の詰め合わせだということ。 「宣教という愚かな手段」と冷静な分析を加えたパウロさんは、知っていたし、願ってもいたでしょう。「そんなに人をお救い

になりたいなら、神様が直接お出でになって、実演実技のように奇跡をお見せになって、その御業と威光を遺憾なく発揮されればいいじゃないですか」と。「そしたら、みんな信じて救われますよ」と。トマスさんのような、疑いと、そして、きっと少々の訝しさを神様に対して持っている人は大勢いるでしょう。なのに、なんでこんな「見ないのに信じる」「聞いただけで信じる」ことを求める愚かな手段を強いるのだろうか、と。

実は、「宣教という愚かな手段」の後に書いてある、「お考えになったのです」という言葉には、別の意味があります。それは、「気に入っている」「好ましいと思う」ということです。つまり、神様は、あえて宣教という愚かな手段を強いて、人々の救いを実現されようとされているけれど、それは、そのようなやり方を気に入っているから、そのようなやり方が好ましいからと思っておられる、ということです。・・・、それでは、まあ、それはそれで、救う気あるんか、ないんか、よく分からない感じがしないでもないですが、ただ、神様は、御自分で完全無欠な、素晴らしく輝かしい空前絶後の宣教活動をされるよりも、不完全で心折れやすく、言葉足らずで、押しが弱すぎたり、強すぎたりする、そんな私たちが行う宣教活動の方を気に入っておられる、それで良いと言ってくださっている、ということです。

そんな宣教活動を好まれる神様なのだから、今日の聖書箇所におけるトマスさんの反応は、仕方ない。神様の好まれる「愚かな手段」に対して、ある意味、正しい反応を示したわけです。効果的ではない、信ぴょう性もない、そんな「愚かな手段」に対して、トマスさんは、「もう、そういうのは良いから、証拠を見せろ」と言ったわけです。これって、決して立派とは言えませんが、普通にあり得る反応ですよ。そして、私たちが教会の外で感じることのある、信仰への無理解の一部にも、この反応が含まれているかも知れません。

さて、そんな「愚かな手段」に対して、果敢にも文句を言い放ったトマスさんの前に、満を持し

てと言うべきか、復活の主が現れました。のちの展開から「親玉自ら咎めに来た」と表現できるかも知れません。ここにおけるイエス様の御言葉と御業は、少々不思議です。神様は「愚かな手段」を好まれるにも関わらず、イエス様が行われたのは「愚かではない手段」、まさに誰が見ても信ぜざるを得ない奇跡をお披露目されたのです。これは、非常に有り難い、僥倖とも言える特別大サービスだと言えるでしょう。トマスに対して、神様とイエス様は「愚かな手段」ではなく、私たちが心のどこかで願っている奇跡の御業を、思った通りの御業の実現を、ここにおいて示されたのです。まさにトマスにとっては「願いが叶った瞬間」ですよね。羨ましいと思います。私たちに対しても、毎年のイースターの度に、神様とイエス様の目を見張るような御業を示していただければ、どれだけ嬉しいかと思います。でも、神様とイエス様は、トマスにしたような「愚かではない手段」を示されることは、ありません。

しかし、それは、29 節にも書いてある通りです。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる者は幸いである」と。奇跡を目の当たりして、「わたしの主、わたしの神よ」と賛美することが赦されたトマスに対して、イエス様は「見ないのに信じる者は幸いである」と言ったんですね。つまり、ようやく主への信仰を確かにしたトマスは幸いではない、と。イエス様の復活の奇跡を見たトマスが幸せじゃない。だとすれば、トマス以外にも復活のイエス様を見て、信仰を新たにした人々も幸せとは言えないかも知れません。じゃあ、誰が幸せなのでしょう。復活の主に出会えた人々が幸せではないとすれば、一体だれが、幸せなのか。

それは、「愚かな手段」によって、「見ないのに信じる」ことによって、クリスチャンとなった私たちです。復活の主に出会ったわけでも、その弟子たちから直接報告を聞いたわけでもない。2000 年もあとに生まれて、大陸と海を挟んで遠く東の国に生きている。あるのは、聖書だけ、教会だけ、そして信仰の先輩だけ。それでも、復活の主を信じて、今日ここに集い、イースターを喜び祝い、

復活によって示された大きな希望を受け取ることができる、そんな私たち。私たちこそ、まことに幸いな人だという事です。29 節の御言葉は、トマスに対する叱責ではありません。これは、この御言葉しか読むことが赦されていない、この聖書を開いて読むことだけで主の隣在を信じ、感じられる。そんな私たち信仰者に向けられた、励ましと慰めと祝福のメッセージなのです。

「今日、イエス様が復活された」。この大切なメッセージも、私たちにとっては重要ではあれ、全然そうじゃない人は、沢山いらっしゃいます。「何を馬鹿なこと」「そんなことあるわけじゃないか」「まあ、そういう捉え方もありますよね」。証拠がないので、こちらも説得に窮します。けれど、それでいいのです。「主の復活を宣べ伝える」という、その宣教命令でさえ、そもそも「愚かな手段」なのです。神様は、そのことを良くご存じです。良くご存知な上で、その「愚かな手段」を好まれているのです。だからこそ、私たちは、ここで信仰を言い表すのです。「私たちは、主の復活を宣べ伝えるという愚かな手段しか知りません。なので、あとのことは神様が導いてください」と。著名な神学者であるカール・バルトから引用します。「教会が担う宣教の不幸、苦境、言葉の混乱、無力さ、見渡す限りの不純な教えの海…。しかし、人間の失敗を権威ある方法で生かし用いる神の成功、われわれがしくじることを神は良くしてくださる」。

トマスと違い、「見ないのに信じる」ことのできた私たちの信仰の業を、努力を、祈りを、願いを、神様は決して無駄にはされません。たとえ、私たちが信仰継承に失敗したと思っても、そこからが神様の領域です。主の復活を成し遂げられた神様の本領発揮です。だから、私たちは、復活された主イエス・キリストのお姿を心に思い描きながら、「見ないのに信じる幸いな人が一人、ここにいます」と信仰告白をし、その幸いの宣言をしっかりと受け止めて、「愚かな手段」に臆せず従って、救いの御言葉を、恵みの福音を宣べ伝えていくのです。死さえも克服し、希望と共に蘇られたイエス様の御名によって、ちょうど明日から始まる新年度も、心を燃やして、主を賛美しながら、そし

て、祈りながら、1日1日を生きてゆきたいと願います。主の御復活、おめでとうございます。

お祈りを致します。

神様。あなたの御心は、私たちの思慮よりもはるかに深く、私たちの想像を超えて高く、にわかには信じられない御業と御言葉によって、新しい道を示してください。あなたは、愚かな手段を用いて私たちに信仰を教え、主の復活という類稀な奇跡によって私たちに一筋の光を与えてくださいます。それは、この世の知恵から言えば、確かに愚かなことです。しかし、その愚かさこそ、この世のいかなる悲しみも、苦しみも、絶望も、諦めも及ばない、信仰による希望があるのだと信じます。どうか、神様、主の御復活を喜ぶ、このイースターから、再び新たな1年を歩み出そうとする私たち一人一人に、信じることによって得られる幸いを豊かに示してください。「見ないのに信じる人は幸いである」という主の御言葉を、十分に味わわせてください。そして、その幸せと喜びを、私たちの隣人に臆せず宣べ伝えていくことができますように。どうか、支え導いてください。

このお祈りを、復活の主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

4月の召天者を憶える祈り

聖書：ヨハネの黙示録7章13～17節

すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。それゆえ、彼らは神の玉座の前において、昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。」

小山玉江姉 こやま たまえ し (2005年4月 2日 召天)
杉原政吉兄 すぎはら まさきち けい (1983年4月 8日 召天)
柴田芳子姉 しばた よしこ し (1987年4月12日 召天)
野村勇吉兄 のむら ゆうきち けい (1996年4月18日 召天)
川瀬義雄兄 かわせ よしお けい (2004年4月20日 召天)
松浦由数兄 まつうら よしかず けい (2012年4月27日 召天)
木村愛子姉 きむら あいこ し (1948年4月 召天)

神様。

主の御復活を喜び祝う今日、私たちは4月にあなたの御下へと召された方々を憶えて祈りを合わせています。天地創造の前から存在した、あなたの愛と、あなたの栄光が、先に召されし信仰の先達の上に豊かに示されますように願います。彼らは、この地上において、あなたから与えられた務めを全うし、その人生を走り切り、天へと帰って行かれました。どうか、永遠の御国に辿り着いた、この方々の上に、生前あなたに捧げたその信仰に相応しいだけの恵みと慈しみを注いでください。また、今ここで、あなたに与えられた命を懸命に生きる、私たちのことを顧みてください。来る再会の日、敬愛する懐かしい信仰の友人たちと相見える時、私たちが自らの人生を胸張って語る事ができるように、私たちの日々の生活を導いてください。天の上には永久の安らぎと慈しみがありますように。そして、地の上には、あなたの力強いお支えと、豊かな憐れみをお与えください。私たちが、いずれ天へと帰っていく、その時まで、あなたを見上げて、信仰に守られて生きることが出来ますように。この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。